

龍谷大学世界仏教文化研究センター
2016年度臨床宗教師特別講義

講演名	ホスピス・緩和ケア ―ビハーラ病棟から
開催日時	2016年5月25日(水) 13:15~14:45
場所	龍谷大学 大宮学舎 清風館 B102 教室
講演者	あそかビハーラ病院スタッフ ・事務主任 藤田慶子先生 「僧籍をもつ病院事務として」 ・看護主任 東承子先生 「寄り添うとは」 ・ビハーラ僧 山本成樹先生 「いのちを支えるもの」
司会	銅島直樹先生(龍谷大学 文学部教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門
共催	龍谷大学実践真宗学研究科
参加人数	58人

【講義内容】

■事務主任 藤田慶子(ふじたきょうこ)先生

あそかビハーラ病院に勤めて9年目。最初は、僧籍をもつものとして、宗教色を出すことについて悩んだ。今は、出すことも隠すこともないという気持ちでいる。

事務職としてこんな経験をした。

毎日お見舞いに来られる家族の方に「お疲れじゃないですか？」と声掛けすると「疲れてるけれど、後悔したくないから」という返事があった。看護師とその話をすると、病室では常に気丈に振る舞う方らしく、病室内では言えない本音を聞かせていただいたように感じた。つまり、事務職は医療現場ではないからこそ打ち明けてもらえる立場にあるのではないかと思った。

ただし、患者さんが辛くなると、事務はむやみに病室には入らない。看護師は話せなくなって状態から、さらに見守ることができる。役割分担、トータルで患者さんを看るのが、ビハーラ病院でできていること。

以前「法事はグリーンケアである(カールベッカー氏)」という話を聞いて驚いた。僧侶だからこそ関われる場を大切にするということを再認識できた。

今は立場上、情では動けない。我ながら冷たいなと思うこともある。でも、仕事に追われている私の状態は、患者さんの方がよく見ているように思う出来事があった。

「あんたは元気で頑張ってや」と掛けられた言葉に対して返す言葉が難しかった。

その時、「○○さんもね」と返事したことに後悔している。○○さんはそれ以上元気で頑張れないから。すべての関わりがうまくいっているわけではなく、うまく向き合えないこ

ともある。それでも事務は、病院の入り口。初めて話す立場になる。藁をもすがる思いで来られる方が多い。だからこそやりがいも感じている。

■看護主任 東承子（あずましょうこ）先生

「寄り添う」とは響きのいい言葉。いうのは簡単だが実際に寄り添うことができるのかと考えると難しい。そもそも「寄り添う」とは何かを一緒に考えたい。

事例1

目の前で苦しみもだえている方に対して逃げ出したい気持ちになる。Aさんもそんな患者さんだった。そばにいて左側でマッサージ 30分経って、自分の気持ちに変化を感じた。自分自身の姿勢を保つのが大変になってきた。また、自分の勤務時間が終わりに近づいてきた。そんな時、Aさんのことを考えていない自分に気づく。Aさんは「もう疲れたでしょう」と、自分に気を使ってくださる。申し訳なかった。自分勝手な自分に「恥」「申し訳ない」「ありがとう」の気持ちが芽生えた。

事例2

Iさんは、注射を拒否される方だった。痛み止めを拒否するには理由がある。それは、痛むことが生きている証だからとおっしゃるのだ。さらには「私を助けなくてほしい」と言われた時、誰のための看護なのか、根本的なところで悩むことになった。悶え苦しんでいる人に、素直に助けの手が出ない。そんな自分は誰の看護をしているのだろうか。ひょっとすると「私が苦しんでいる人を見たくない、苦しみたくないだけなのか？」と。

事例3

Sさんは余命数日ということが医師から告げられている。自分の唾液を飲み込んでも咳き込むような状況。そのSさんが「肉まんを食べたい」と訴えてこられた。困った末「もう少し様子を見ましょう」という判断をした。しかし、食べたい気持ちの背景は「食べて死んでもいいと思われていたのではないか。」とも考えられる。この方の思いにどこまで寄り添うことができたのか。葛藤が生じる。

そんな時、マザーテレサの「あなたの胸が痛むほどに人を愛しなさい」という言葉が腑に落ちる。臨床宗教師を志すみなさんには、自分自身の胸の痛みを感じられるようになってほしい。これは対人支援に必要なことではないかと思っている。

阿弥陀様は、究極の寄り添いであり、どこまでも私と共に泣き、悲しみ、涙してくださる「摂取不捨」の存在。一方で、私は、私の都合で平気で人を切り捨てる存在。

その点を自覚し、次の3点をみなさんに考えて欲しい。

*自分を知ること 自分を知らなければ「寄り添えない」自分に気づかない

*相手を通して自分が見えてくる

*鏡を持たなければダメ ありのままを映し出してくれる鏡

なぜ苦しいか？というと、現実を受け入れられないから。どうにもならないことを、どうかしようとする自分がいるのは、ありのままを受け入れてもらえないから。

僧侶はこういう現実の「苦しみのシステム」を理解している存在であり、全てを吐き出せる、安心できる居場所であってほしい。安心を与える人になって欲しい。やはり人は、安心できるときに泣ける。笑える。ここに僧侶の役割がある。

■ビハラー僧 山本成樹（やまもとなるぎ）先生

月～木でビハラー病院に勤務し、金曜日は三菱京都病院に勤めている。ある人の話が印象に残っている。60代女性は、夫からの暴力、借金、私の人生は何なんだろうと考え悩

み続けてきた人生だと私に話をしてくださった。しかし、「病気になったおかげで。。。」と切り出されて驚いた。「あの主人が私のシモの世話をしてくれるんです。」そこに、彼女は老いること、死んでいくことに意味を見出していた。

また、ある場所で、2人1組で「あなたは誰か？」という問いを2分間、問い続けるワークを実施したことがある。質問は一方的、答える方は、答えがなくなってくる体験をした。それは、実は、癌患者が受ける質問の疑似体験だったのだ。

私たちの存在を支える3本柱（時間 関係 自律）について考えてみたい。

- ・時間が存在を支えるということ。余命宣告された方は未来を失うことである。
- ・関係性が存在を支えるということ。これは、人間関係がなければ生きていけない。
- ・自律が存在を支えるということ。これは、病状の進行によって、自分にできることが減る、あるいは自分が自分でなくなっていく感覚は何者にも代えがたい。

仏教においては存在を支える3本の柱に答えが与えられているように思う。1つ目は、お浄土という未来が約束されている。2つ目は還相回向。3つ目は、自分に何もかもができなくなっても摂取不捨であるということだ。「仏法は苦を救うのではない。苦悩する人間を救う」ということを知らされた。

私自身、仏教に出会って癌になるのは嫌だけど、癌になって死にたいとも思うようになった。大切な方を亡くしている人ほど、苦しい表情で死ぬことが少ないように思う。また、再び会える世界が用意されているからだ。

【まとめ】

藤田先生の話の中で「情では動けない、けれど、、、」という、単なる病院事務職員ではなく、温かみを感じる正直な思いが聴衆を惹き付けたように感じた。東先生は、事例をあげながら、単純ではない「寄り添う」ということに対して示唆を提供してくださった。痛みを覚えること、これは高い場所から苦しむ人に関わるのではなく、近い場所に関わることの重要性を教えてくださいましたように思う。また、山本先生は、臨床で働く宗教者は死生観を持っていないといけなことを強調された。また、ビハラー僧としての経験から、もともと「ケアする側される側」という意識から変化したともおっしゃった。つまり、患者さんに対して3人称（他人）の立場から2人称（あなた）の立場へとへと変化するという点で、この点については深く共感した。

3名とも、正直な言葉を聴衆に投げかけてくださった。それはマニュアルを通して、苦しむ人に関わるのではなく、感じたことに正直に、それは極論、言葉にしないという答えもあるし、一緒に涙することもあったことだった。

最後に、苦しむ方と係わる際に、一人で受け止めることは難しい。仲間がいることが大切という経験からくる言葉も忘れずに心に留めておきたいと思った。

【文責】龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 金澤豊